地震考　全

和書門
類 二六八八七
號 二
函 四
架 二
冊 一

2
3
8

雜書 二ノ二

395
内閣文庫
和書
類 二六八八七
號 一
冊 一
大六 函
三 架
二

内閣文庫
番號 和 26887
冊數 1（1）
函號 166 395

日日文庫

166-395

国立公文書館
National Archives of Japan

濤山先生筆記

地震考

浅草文庫

頃京師地大震云吾友不山東條篤主
人輯小記來而請余題言見其記今古
諸説畫擧出矣因寫仁和年間之徵
以代贅云務塞其責云爾
文政十三年庚寅秋七月
皐堂岸成

地震考

文政十三庚寅年七月二日申の時ばかりに大に地震(フル)ひ出
て、おびたゞしくゆり動(ウゴカ)し、されバ洛中の土蔵築地など
大にいたミて潰(ツブ)れし家居もあり、土蔵の潰れしハ数多
ありて、築地ある塀などハ大かた倒(タフ)れ、怪我(ケガ)せし人も数
多あり、昔ハありもしらず近き歳の天地にかゝるため
しきハなかりけれバ、人〻驚きおそれて、それ〳〵家
を走り出て大路に夜もの寝さ仮(カリ)の席をかまへ

いくばく二三日がほどハ家の内に寝る人なく或ハ大寺の境
内にうつり或ハ縄手の川原へうつり西なる堤邊になど
ひと夜をあかしけるかくて三日四日過ても猶名残
の小さき震ひ時々ありけれ共凡ハ昼夜に二十度も
有しが次第に志づまりて七八度ぞあり三四度なる事
もあり然れども廿日あまりを経れども猶
折々ありていつの震ひもやまねど人々のまどひ恐るゝ
ことなり世の諺(コトハザ)に地震ハそれとわきびしく大風ハ沖往

つよく雷ハ事など甚しといへる事をおもくはしめの往の
大震ハなのさつてとくはなしおきとなほ婦女子小児など
さびしハいづとあんじやゝびくいろにやしと尋
ねらふ人のさきなれきハ舊記を志るして大震の後小
震ありて止(やま)ざりしを挙(アゲ)て人のこころをやすく
せんとするに志るし侍る
上古より地震のありし事国史にみえたる條ハ類
聚国史一百七十一の巻災異(サイイ)の部に挙て詳(ツマビラカ)なり

三代實録 仁和三年秋七月二日癸酉夜地震 中畧 六日
丁丑虹降東宮其尾竟天虹入内藏寮 中畧 是夜地震
中畧 卅日辛丑申時地大震動経歴数尅震猶不止天皇出
仁寿殿御紫宸殿南庭命大蔵省立七丈幄二為御在所
諸司舎屋及東西京廬舎往々顛覆壓殺者衆或有失
神頓死者亥時亦震三度五畿内七道諸国同日大震官
舎多損海潮漲陸溺死者不可勝計 中畧 八月四日乙巳地
震五度是日達智門上有氣如煙非煙如虹非虹飛上属

天或人見之皆曰是羽蟻也 中畧 十二日癸丑鷺二集朝
堂院白虎樓豊樂院栖霞樓上陰陽寮占曰當慎失
火之事 十三日甲寅地震有鷺集豊樂院南門鵄尾上
十四日乙卯子時地震 十五日丙辰未時有鷺集豊樂殿
東鵄尾上 下畧
皇帝紀抄ニ云 文治元年七月九日未尅大地震洛中洛
外堂社塔廟人家大略顛倒樹木折落山川皆寖死
者多其後連日不休四十餘箇日人皆為悩心神如酔云々

長明か方丈記ニ云元暦二年の比大なゐふる事侍りきそのさまよのつねならず山くづれて川をうづみ海かたふきて陸をひたせり土さけて水涌上り巌われて谷にまろび入渚こぐ舟ハ波にたゞよひ道ゆく駒ハ足の立どをまどはせり況や都のほとりにハ在々所々堂舎塔廟一として不全 中略 かくおびたゞしくふる事ハしばしにて止にしかど其名残しばらくハ絶ず世の常におどろくほどの地震二三十度ふらぬ日ハなし十日廿日過にしかバやう／＼間遠になりて或ハ四五度二三度もしハ一日まぜ二三日に一度なんど大かた其名残三月ばかりや侍りけんと云々

天文考要ニ云寛文壬寅五月畿内地大震北江最甚鐘動屋発至於歳終

本朝天文志ニ云宝暦元年辛未二月廿九日大地震諸堂舎破壊鐘動至六七月止

かく数々ある中にも諸るぞ多大震して後小動あり止て

されバいまだかれほどの大震ハなし我友廣嶋氏
なる人此国にて大地震に四たび逢たる事ありしま、
障害して始末をよく知れり小動ハ久しくおれども此様
やおらじときハ一度も知しとゆうされたる是現在の人にて
説とききうたに見えたり

○地震之説

経世衍義ニ孔鼂(カク)曰陽伏テ于陰下ニ見ル迫(セマル)テ于陰ニ而不ル能ハ升(ノボル)以
至ル於地動ニ如此陽気地中に伏して出んとする時陰気に

抑(オサ)へられたる陽気ハなほ地中に激(ゲキ)攻(コウ)して動(ドウ)揺(エウ)する
なりと国語の周語に伯(ハク)陽(ヤウ)父(フ)の言なれども如此古代よりいわれし
旧説をしるす
天経或問に云地ハ水ト気の渣(カ)滓(ス)聚(アツ)まりて形(ケイ)質(シツ)を成て
元(ゲン)気(キ)旋(セン)転(テン)の中に束(ツカ)ね故に兀(コツ)然(ゼン)として空に浮んで墜(オチ)ず
四(シ)圍(井)に竅(アナ)多くして相通ず或ハ蜂の窠のごとく或ハ菌(クサビラ)瓣(スヂ)乃
ごとし水火の気其中に伏して蓋(ケダシ)気噴(フン)盈(エイ)して舒(ノ)びんと欲
してのぶることをゑざる人身の筋絆(テレ)して振(ミャク)揺(ウゴク)がごとし亦

雷霆を聞かず北極下の地ハ大寒赤道之下ハ偏
熱なしといへども地震おし砂土の地ハ氣疏にして聚ま
らざれバ震少し泥土之地ハ氣の藏むること故に震
おし温暖之地多石之地下ハ空究ありて熱氣吸入て旋
轉のところに攝斂せられ極る則ハ舒放して其地を激搏
まことに大筒石火矢などを高楼巨塔の下に發さバ
甚震衝を被らざること無きがごとし然れども大地遍
しく地震ある事なし震ハ各處各氣各動なるこ

唯一處の地のみならず輕重に由て色々の變あり地より
新山或ハ海に新島あるの類ひおなじく震後地下の燥氣
猛迫して熱火と變じて出るハ則震停るなり

○地震之徴

震せんとする時ハ庭間に地に孔數々出来て細き壤を
噴出して田鼠坊ぶらしと見え蚯蚓などの持上るの類
あらんとぞ
又老農野に耕す時に煙を生ずるといふときをみて時

に震せんとする前を知ると
又井水にハかに濁り濁るも亦震の徴(しるし)あり 已上天文考要
又世に云伝ふハ雲の逆くなるハ地震の徴なりと是雲
にハあらず火の上升するにて煙のごとく雲のごとく
みゆるなり
地震の和名をなゐと云 和漢三才図絵にハなゐとあり
なゐの仮名然るべからずと
季鷹翁の説になハ魚にてゐハゆりの約(つゞめ)りたるにて

なゆりといふ事なりむかし魚の尾鰭(ひれ)を動かすごとく
動揺するを形容して名目とせるかなゐふるとハ重
云の事なれども古なゐハ名目となりしるべしと是
をもて思へハ俗に小児の俗説なれども大地の下に大
なる鯰(なまづ)の居るといふ事昔より云伝へたる俗云にや又
建久九年の暦の表紙に地震の虫とて其形を画
きし日本六十六州の名をを記したるもの有俗説なるべ
けれども既に六七百年むかしよりかゝる事もあれバ鯰

の説も何れの書に據あらんか佛説にハ龍の所為とも
いへり古代の説ハ大やうかくのごときものなるべし
○佐渡の國にハ今も地震をなゐふると云なるハせり地震と
いへるを通ずれバ古言の邊鄙に残る事なるべし
○三代実録仁和三年地震の條に京師の人民出廬舎居于衢路とあるもちかきひの京師のあるさ後もかくのごとく
なりしと聞えたり
○地震に付て其應徴の事などハ漢書晋書の天文志
など各其應を詳しくあれども唐書の天文志よりハ
變を記して應をのせざれバ是春秋の意に本づくなり
今太平の御代なれバ地震の應かとあやしまで地震即災異に
して外に應の有べきにもあらねバ人々こゝろをやすんべし
みな人の勢をなすまじき故

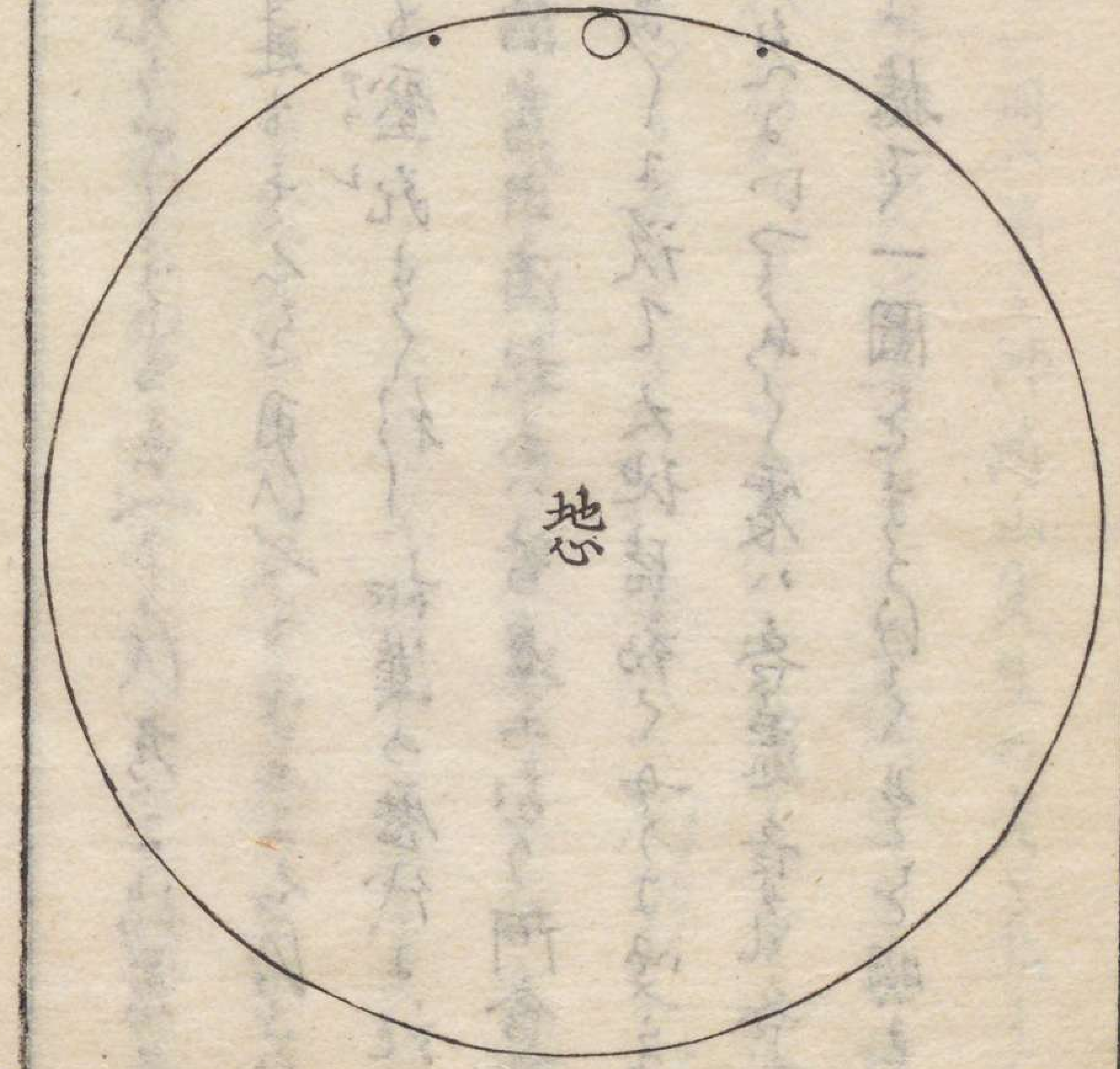
文政十三年寅七月廿一日

思齊堂主人誌

○此地震考一冊ハ予が師濤山先生の考へ示されてこの
頃童蒙婦女或ハ病者なとさまざまの虚説にまど
ひ恐れをのゝきまさ今に小動も止まで此後大震
やあらんとうれふるも多かれバ歴代のためしを挙(アゲ)て其
まどひを留(ト)めこゝろを安んぜしむ 京師ハ上古
より大震も稀なり 宝暦元年の大震より今年まで
星霜八十年を経たれバ知る人まれなり 此災異に係(カヽリ)
て家を損し疵をかうむる人数多なり 時の災難とハ

いへども亦免るべしとも云べからず 是に地震多き国
ハ倉庫家建もそれを用ひ人も平日に心得られバ太
震といへども壓(アツ)死まれなり 和漢の歴代に記せし地
裂山崩土陥嶌出濤起ホハ皆邊土にあり 阿含経智度
論などにはくはしく説て大地皆動くやうに覚ゆれど
ハあらず 初めにいへるごとく震ハ各処各気各動也 予
天経或問に據て一圖をあらはし是を明す

地球之圖



地球一周九萬里是を唐土の一里六町として日本の一里三十六町に算すれハ一周一萬五千里となる志かる時ハ地心より地上まで凡二千五百里なり此図黒點の間凡一千五百里なり今度の地震方二百里といへる所ハ僅か図せる所の小圓の中にみちたり是をもて震動する所の微少なるを 地球の廣大なる事をおもひはかるべし

○愚按するに天地の中造化皆本末あり本とハ根本にして心(こゝ)なり心とハ震動する所の至て猛烈(ハゲシ)なる所を

さて其心より四方へ散して漸く寛緩なるを末とす去
れバ東より揺来るも始ハ西より動き来るにあらず
其心より揺初て四方へおよぶ其浪ハ段々微動して畢る
なり此度震動する所京師を心として近国に亘り
末ハ東武南紀小越西四国中国に揺る又京師の中に
ても西北の方心なりしや其時東山にて此地震に遇し
人まづ西山辺に気立升りて忽市中土烟をたてゝ
揺来り初めて地震なる事を知りしとぞ

○又地震に徴ある事　現在見し所当六月廿九日日輪西
山に没する其色血のごとし同七月四日月没する其色赤
同じ　和漢合運云寛文二年壬寅三月六日より廿日まで日
朝夕如血月亦同五月朔日大地震五條石橋落朽木谷崩
土民死至七月未止まらず廣嶋氏の譚に享和三年十一月
諸国ありく佐渡の国小木といふ湊に滞留せしに同十五日
の頃なりしに同宿の船かゝりせし船頭ともに日和を見
むとてほとりなる丘へ出しに船頭のいはく今日のてんき

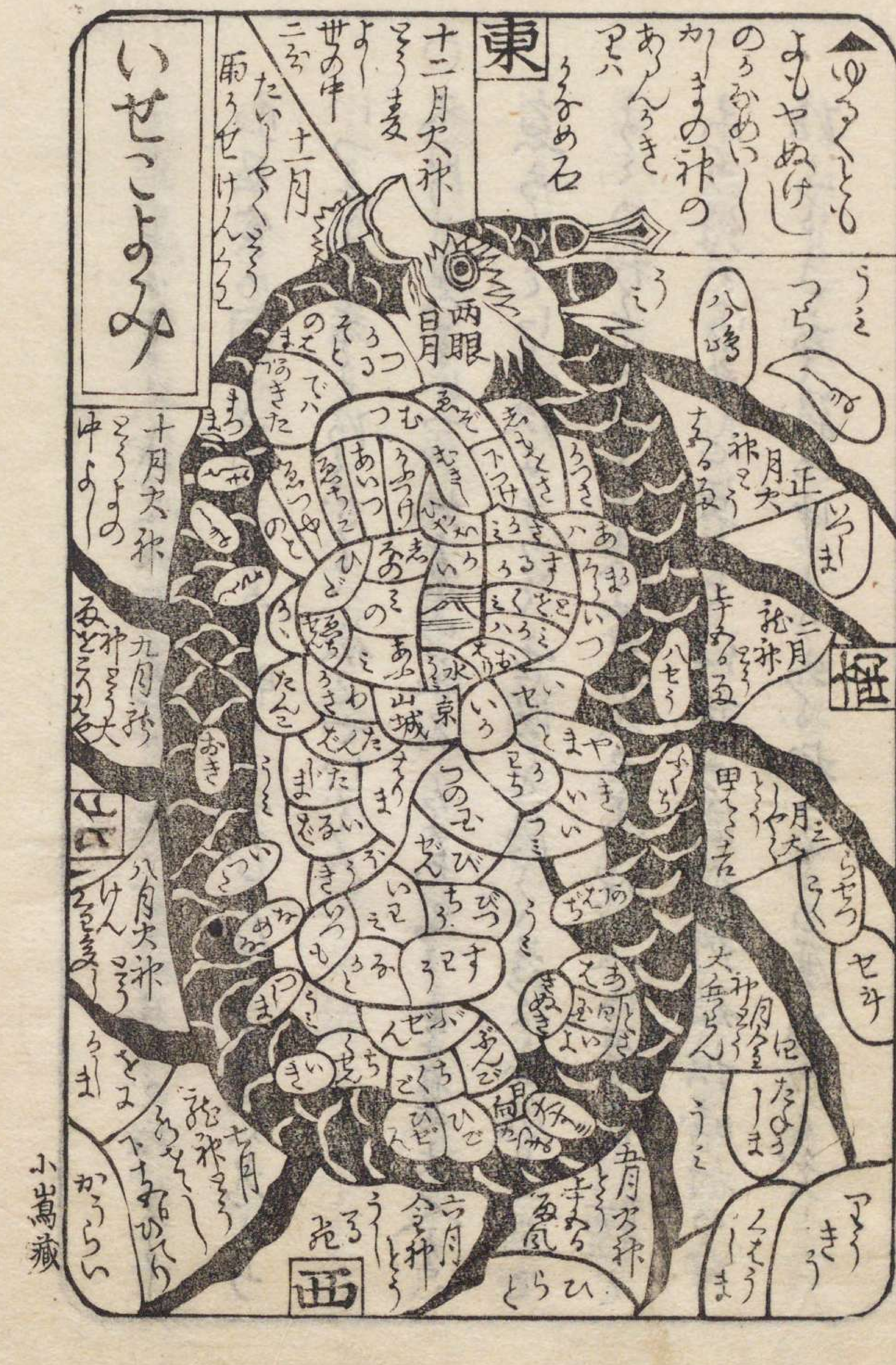
識にあやしげなる雲濛々として雲山の腰にかゝれる山
半腹より上ハ峯なともわかる雨もなくして風も静る
ときハ覚へし家年まゝのごとき天変をきんじと大小
あらむ此時廣嶋氏考るに日光ハ雲のたなびきにおゐて
地気の上升するならん予幼年のとき父に聞ける事
あり地気の上升するハ地震の徴なりと此時も猶豫有
べからずと急ぎ諸方に触らし其出をつげ此地震ハ山
若ハ海にして甚危し又来るとも此時ハ如地にのがれん

とく人々して旅人など生へ送りきてくに支度しるく
立出ぬ道の往還里計も行とおもひしが山中にて果し
て大地震せり地ハ浪のうつごとく揺て大木など枝々
な地をおふしまろびなどし漸にのがれ去りぬ此時小
木の浜ハ山崩れ堂塔ハ倒れ潮漲て舎屋咸海に入
大に荒る岩海より涌出るそれより毎日小動して翌
年六月に漸く止けるとなん其後日本金山にいたりし
時其地震にハ定見して完も潰れ人も損ぜしとや聞く

訪ひしに彼ハ答へて曰く此地ハむかしより地震ハ三年の
間にかならず有る地震も三日以前に其徴を知りて諸穴
に入るなど周章せし故一人も怪我なしとなり其徴を
いかにしてか知るやと問しに時に地震せんとする前ハ穴の中
地気上昇して傍（カタハラ）なる人もたがひに揺り上ハ唯漂ふと
して見へし此気を地震の徴としりて掘るに震ふ地
中に入るものハ地気をよく知る為ハ穴中にありてよく上
昇の気を知る也度地震せんとする時数千の鷺一度

に飛をとんる又或人六月九七日の頃ハ時ならぬ日も出ぬ先より
虹丑寅の間にあたりてこれをとりたる虹ハ日にむかひて多つハ西ニ出
いづれも常にあらざるハ徴とやいはん
○又はじめにいへる地震の和名なゐふる季鷹大人なゐハ
魚なりといふ説によりて古図を作く其後出る是図て
よこの初めし出して次に建久九年（つちのえむま）の暦凡三百五十五ケ日と
ありけれハこれを写さし伊豆の国那珂郡松崎村の寺
伝ふる古き唐紙の中より出る摺まきの暦なりとぞ

槐記享保九年の御話に云く昔四方市といへる盲人あり名
誉の調子聞にて人の吉凶悔吝をト占ふにおもく遠きこと
秘し應山へハ御みん出ら毎々参りて御次に伺候せ
し晩年になりて上にせしハ生れきことをおぼえて甚くや
し頃は人に交わるあまり其人の吉凶を耳にひゞきて
いとかしましとやけれども是ぞハ不度々の高名すて
なぞへりし此四方市胡風あり起きて僕をよびおきて
何き調子あり此調子にてハ大方京中ハ滅却なるべし



ぞ急ぎ食をても迯去て我もと先嵯峨の方へ逃ひゆけ
と云日頃の手ぎハどもあ是ハ了迷為をはして嵯峨より
嵐山の麓大井源原に着く暫く休息して云せいまだ胸
子なおらびあるいぶし大方大火事成べしと人家を知
をも行きて北へ越せしにいまだ同し胴子なるハ世も急示
とぞんゆ愛宕にハ知音る坊あり是に逃ひゆきとふ以さ
たく文登山して其坊に着く坊主出て何とてかく早く
ハ登山しけるとゆせしハ去かしの事有と答ふ共ちいふに

と向てても抑安きぞ此ひしそもいるき所へ参りしと云世示
に護六堂あり此に行きよと呼ひしハ此堂に入く大きによろ
こびねく安堵に往きり胴子初て少しとて唯いつまで
も此に居てきはゆせしが頓て地震ゆき出し夥しき事
いふそらかり（世間に云寅年大地震）何とか志すりなむ彼護六堂ハ架作（タナヅクリ）にて
絃て添岩へ崩れ落て破損し四方市も立しく成る六十余
里までも有べきの此一生の終りをとして人の吉凶さへ姦きほどに
知るもの已の終る所をと去らざるのみに死ぞ死場にて安堵し

けるゆゑそ不審なき吉の極る所ハ凶凶の極る所ハ吉なれハ然レ
毎度無禅ニ拘泥なかれと伝ふる愚按るに四方市の古考著きすり
賞きるに余りある既に天地の変異を知りて我を容るるの行しぬ
うへなるれ此出すぶりて潤ひ直りしに其変もあんなれバ其気ハ
陰極まりて陽に変じ陽極りて陰を生じ楽極りて哀生じ
といふに同じ是れ其頃ハ京都一般の大変なる震気充満して歩
むに道なく迹るに所なしと云傳なれバ四方市も労難なりに極ると
いふ変も甚度て其音洞の直りしも至極のことにてさんて候

素問五運行大論ニ曰風勝ツ則地動ク　怪異弁断ニ曰
此説に随ふ時ハ地震ハ風気の所為也又曰地震ヲ鯰の
説世俗に有俳説なるにや風を呼く鯰としたるものあ
奥ハ陰中の陽物なれバ風にたとへられん珍ほそ
も正理にハ遠き説なり　白石の東雅に云地震をなゐといふ
ることいふハなゐとハ所なり　ふることハ動くなり　所動の義なり
今俗になゐゆるともいひ又なゐふるも又動くなりゆるぬと
いひゆるぎなどいふもまた同じ上古の語にゆるとうして

なとゞいふも即是なり　愚按るに又ちゝふると北越辺に
にいふ三才図会になへと出たるハ何にかもとづきたるにや
もしなへと云ハなえをつゞめハ収らる収ハ根にして地
をいふ地震まで子細なし　揚子方言云東齊謂根曰土
非専指桑根白皮　又日本紀神代巻に根之國と出る
るハ地をさす歟　又或人云なゐゆるとハなゐゆれる
なゐのうつりゆくゆるをいふ矣

洛東　東隴菴主人誌

題地震考後

災異之可恐莫大於地震以雖其地折山陥海傾河翻不能翰飛戾天也然若夫古今傳記所載及近時邦國更有棟壊牆倒傷害人畜者人毎邈然視之徒為一場奇譚及其實歴親履心駭魂銷而後始回想當時以知為可恐已茲庚寅七月二日京地大震餘震于今未歇人心洶々言震者有甚

爲將憑何得免民之訛言亦孔之將言某
日時震甚又言某事爲祟又言某日暴風
雨與震並臻重以丙王根賊之警人不知所
底止或廢業舍務至携家逃震遠地
濟山先生老益悃愊憫其如此爲錄此言
以喩民心釋其惑故亦諱不饒考徵亦
不務多東隴主人受而數衍稗而行之
請余識其由適有人爲余說其先人之言

云如某什器今人不悉其用注以爲不便不
知方其大震掩此庇身雖棟壊牆倒保其
無恙又如今灯架設承蠟炬者亦皆震之
備蓋寶暦大震之餘所慮而設至天明
欝攸之後人不知震之可愳今日之攝造
唯災之備可見非實歴親履思慮不及
亦人心向背之速如此因並記此欲人之觸
類而長之毎有所懲毖有所備預

文政十三年庚寅秋八月上澣

三織主人識

齋政館都講

小嶋氏藏板

不與賈人

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan